

視床出血を呈したうつ症状が改善した症例

～自立した生活に向けて～

嶋 亜津沙(OT) 田邊 夏美(OT) 宮本 美恵子(NS) 橋本 康子(Dr.)

医療法人社団和風会 橋本病院

【はじめに】

今回、うつ症状を呈した左視床出血の患者を担当した。経過中うつ症状・上肢機能の改善を認めたため報告する。

【症例紹介】

70歳代男性。診断名は左視床出血。中等度の運動・感覚麻痺を呈し入院時は悲観的な発言が多くうつ傾向であった。病前は独居であった。

【作業療法評価】

意識レベルは良好。Br-Stage は右上肢Ⅱ・手指Ⅵ・下肢Ⅲレベルであり感覚も上肢は中等度障害を呈していた。MMSE13点と見当識・記憶も低下しており高次脳機能検査は途中で諦め拒否するなど実施困難であった。ADLは全介助であった。

【治療・経過】

精神面へのアプローチとして入院当初から「早く死にたい」「この体は使えないからリハビリはしても無駄」といった発言が多く聞かれた。このような発言を傾聴し徐々に会話の機会を増やして自発的な発言を促した。ADL内で麻痺側での茶碗把持や袖通し等の成功体験を積み重ね意欲・活気の向上を図った。身体機能面は麻痺側上肢の筋力強化を中心に介入を行った。自動運動が増加したため空間保持等、精細な上肢機能練習を行い実用的な動作の獲得を目指しADL動作介入を中心に行った。

【結果】

うつ症状は改善し冗談を言うなど笑顔が増加した。リハビリも積極的に取り組まれ「一人ですから手伝わないで」と自律意識が見られだした。見当識も正確になり2ヶ月後はMMSE24点と11点の増加が見られた。上肢のBr-Stageは右上肢Ⅴ・手指Ⅵ・下肢Ⅴとなり排泄・更衣動作が自己で可能となったことで自信や自立度が向上した。

【考察】

本症例は入院時、障害受容が行えておらずうつ傾向であった。セラピストとのサポート形成を優先的に静かな環境で自発話の増加を促しながら介入し、自信がつき始めたころに上肢機能練習に加え現状で行える食事や更衣動作の補助手等ADL動作を指導した。特に自立を諦めていた排泄の移乗や下衣操作の成功体験が自信となり意欲を引き出しうつ症状の改善、生活能力の向上が得られたと考える。